

筆者の工夫を評価する力を育てる国語科学習指導の工夫

— 目的に応じて「評価読み」の観点を選んで読む学習活動を通して —

三次市立八次小学校 川本 哲嗣

研究の要約

本研究は、筆者の工夫を評価する力を育てる国語科学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、本研究における筆者の工夫を評価する力を、筆者の認識、表現の妥当性、真偽性、適切性について評価する力とした。この力を育てるために、第5学年において、目的に応じて「評価読み」の観点を選んで読む学習活動を行った。この学習活動は、単元の見通しをもつ段階、目的によって読みの観点が変わること気付く段階、「評価読み」の観点に沿って評価する段階、「評価読みレーダーチャート」を用いて、重点を置く「評価読み」の観点を自分で選んで読む段階を組み合わせた単元構成で行うものである。その結果、筆者の工夫を評価する力が高まった。このことから、目的に応じて「評価読み」の観点を選んで読む学習活動を行うことは、筆者の工夫を評価する力を育てるために有効であるといえる。

キーワード：筆者の工夫 「評価読み」 観点を選ぶ

I 研究題目設定の理由

平成27年度全国学力・学習状況調査小学校国語A5二「新聞のコラムを読んで、筆者の工夫を捉えることができるかどうか。」の平均正答率は全国、本県ともに20%台と低い。根拠を明確にするために引用するという筆者の工夫を捉える力に課題がある。また、同様の力をみる過去3年間の同調査においても平均正答率は20%台で、継続的な課題である。

これは、説明的な文章の学習指導において、筆者の工夫を見付ける学習は行われているものの、筆者の工夫を吟味・評価する学習活動が不十分であることに起因すると考える。それぞれの工夫にはどんな効果があるか、それぞれの工夫は有効に働いているかという視点で工夫の妥当性や有効性などを吟味・評価することで、筆者の工夫を捉えることができると考える。また、実生活において、児童は様々な文種のテキストに触れる。そこでは、読む目的や文種によって読むときに着目する観点を変える必要がある。

そこで、本研究では、第5学年の説明的な文章を読むことの学習において、筆者の意見やそれを伝えるための工夫や論理を吟味・評価しながら読む「評価読み」を取り入れる。そして、目的や文種に応じてどのような観点で筆者の工夫を評価するか、自分で重点を置く「評価読み」の観点を選んで読む活動

を設定する。

このような学習指導によって、児童に、筆者の工夫を評価する力を育てることができると考え、本研究題目を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 筆者の工夫を評価する力とは

(1) 「筆者」に着目することの意味

われわれの身の回りには、新聞、広告、説明書など様々な文種がある。そのそれぞれが、筆者が一定の目的をもって、様々な工夫をして表現したものである。これまで様々な研究者によって「筆者を読む」ことについて論じられてきた。

西郷竹彦(1985)、森田信義(1984)は、文章の「内容やことがら」「表現や論理構造」を手がかりに筆者の認識内容、認識方法を吟味し、自らの認識を形成することが必要だと述べている⁽¹⁾⁽²⁾。また植山俊宏(2009)は、筆者がどのような説得方法を用いているか、それがどの程度の納得を生むのか、という表現面の吟味の必要性も述べている⁽³⁾。森田は、自分の意見を打ち出すためにどのようなことばで表現しているかを読まなくてはならないと述べるがこれは植山の指摘と共通する。

さて、そのような筆者に着目した説明的な文章指

導の目標について、森田（2007）は「説明的文章教材の内容と形式を理解することを通して、児童・生徒を、論理的認識のできる主体として成長させることを目指す。」¹⁾としている。「論理的認識ができる」とは、ものの見方、考え方を筋道立てて捉えることができるということである。筆者のものの見方、考え方を手がかりに自らのものの見方、考え方を鍛えていくところに筆者に着目して読む意味があるという指摘である。同様の指摘は、長崎伸仁（2008）、植山俊宏（2009）にも見られる⁽⁴⁾⁽⁵⁾。

これらのことから、児童を論理的認識のできる主体として成長させていくために、文章から想定される筆者の「認識」及び「表現」に着目させる必要があると考える。

(2) 筆者の工夫を評価することについて

ア 筆者の工夫について

森田（1984）は、筆者の認識（過程と結果）と表現をつなぐ基本用語として、「筆者の工夫」という用語を提案している⁽⁶⁾。説明に必要なことがらを、どのような論理構造に乗せるか、どのようなことばを選択して用いるかにも、筆者の個性が表れるとしている。また、井上尚美（1989）も、筆者の工夫の視点についてまとめている⁽⁷⁾。両氏の考えを認識と表現に分けて表1にまとめる。

表1 森田、井上による筆者の工夫の視点について

	認識	表現
森田信義	・どのような立場からどのようなことを取り上げるか ^a 。 ・どのようなものの見方・考え方をしているか。（過程と結果）	・どのようなことばを選択して用いるか ^b 。 ・どのような論理構造にするか ^c 。
井上尚美	・対象として、何を・どんな態度で取り上げるか ^a 。 ・自分の認識の正しさをどう裏付けるか。	・それらを読み手に効果的に理解させるために、どう表現するか ^b 。 ・それらをどのように順序立てて述べ、文章全体を構成するか ^c 。

以上を踏まえ、両氏の考えの共通点を整理し、①筆者の認識としての《内容・ことがら》、②筆者の表現としての《表現》、《論理構造》と分類して、稿者による「筆者の工夫を読む視点」を次の表2のようにまとめる。

表2 筆者の工夫を読む視点

①筆者の認識 《内容・ことがら》	どのようなことを、どのような考え、立場から取り上げているか。
②筆者の表現 《表現》 《論理構造》	どのようなことばを選択して用いているか。 どのように順序立てて述べ、文章を構成しているか。

イ 筆者の工夫を評価するとは

興水実（昭和40年）は、説明的文章において、批判的な読み、読みながら考える読みが本当に思考力を付ける読みであると考えており、批判的な読みは、取り上げている素材の妥当性、適切性、その推論、結論の妥当性、信憑性の分析、評価を中心にすべきと述べている⁽⁸⁾。また、井上（1989）は、「読者にとって大切なことは、作者がどういうデータを挙げ、それをどう処理しているかという認識の筋道をたどって正確に理解することとともに、その筋道の妥当性・真偽性・適切性をチェックし、批判するということ」²⁾と述べている。阿部昇（2009）は、「語彙・表現の妥当性、事実提示の妥当性、事実選択の妥当性、解釈の妥当性、語彙相互・解釈相互の関係についての妥当性 — 等を吟味（評価・批判）する力を子どもたちにつけていく必要がある。」³⁾と述べている。この3氏に共通していることは、筆者の工夫を読む場合においては、説明されている内容とその述べ方の理解とともに、それらの妥当性、真偽性、適切性についても吟味・評価するという点である。

以上のことから、「筆者の工夫を評価する」とは、「筆者の工夫（認識と表現）について、それらの妥当性、真偽性、適切性について評価すること」とする。

ウ 筆者の工夫を評価する必要性

現代社会は、IT機器の発達等によって多種多様な情報を簡単に収集することが可能な社会になってきた。しかし同時に、得た情報はどのようなものなのか、その情報は正しいのか、どのような過程で生み出された情報なのかなど、自らが情報を吟味する必要がある。であるならば、学校においても自分で与えられた情報を吟味・評価し、取捨選択していく力を身に付けさせなければならない。

そういった意味でも先述した3氏の指摘した、筆者の工夫について吟味、評価するという考えは現在においても必要であるといえる。

(3) 筆者の工夫を評価する力とは

本研究では、(1)(2)を踏まえ、筆者の工夫を評価する力を、表2にまとめた筆者の工夫（認識と表現）の妥当性、真偽性、適切性について評価する力とする。

2 目的に応じて「評価読み」の観点を選んで読む学習活動について

(1) 「評価読み」の観点について

森田（1989）は、筆者の工夫が説明の対象である

表3 阿部，森田，井上による読みの観点

	阿部	森田	井上
内容・ことがら	<ul style="list-style-type: none"> 選ばれた事実は妥当か。 選ばれた事実に過剰，不足はないか。 選ばれた事実に非典型性はないか。 事実提示に誇張・矮小化はないか。 事実が二つ以上に解釈できて誤解を生じないか。 その事実の具体性・示し方は妥当か。 事実が現実と対応しているか。 	<ul style="list-style-type: none"> 必要十分なことが選ばれているか。 不要なことがらは混入していないか。 偏りはないか。 欠如したものはないか。 重複はないか。 	<ul style="list-style-type: none"> 証拠となる資料や事例は十分か。 その事象を代表する典型例か。 隠れた資料や証拠はないか。 反論の材料となるような，反対の立場からの資料や証拠は考えられないか。 不適切な資料や証拠はないか。
表現	<ul style="list-style-type: none"> 選ばれた語彙・表現は妥当か。 選ばれた語彙・表現に曖昧性，恣意性はないか。 比喩・抽象的な用語・ステロタイプの用語・難解な専門用語に問題はないか。 程度，限定の表現が曖昧，不正確でないか。 同じ語彙で示されていることがら相互に不整合はないか。 	<ul style="list-style-type: none"> 言葉選びに厳密さがあるか。 用語，術語は正確か。 思考の単位としての段落に正確さと工夫があるか。 表現に遊びはないか。 文体に工夫があるか。 論理構造の指標となる語にどのようなものがあり，問題はないか。 	<ul style="list-style-type: none"> 重要な語は定義されているか。 用語の意味は一貫しているか。 早まった一般化をしていないか。 比喩や類推は適切か。 語の感化的用法（色付け）はないか。
論理	<ul style="list-style-type: none"> 因果関係に問題はないか。 必要条件と必要十分条件を混同して推論していないか。 解釈，推論相互に不整合はないか。 仮定，相対をいつの間にか既定・絶対と混同したりすり替えたりしていないか。 	<ul style="list-style-type: none"> 論理構造は把握しやすいか。 論理構造に個性があるか。 事例と，判断，主張，意見の間に矛盾はないか。 提起された問題・課題が合理的に解明，実証されているか。 	<ul style="list-style-type: none"> 根拠のない主張・結論はないか。 隠された過程・前提（理由・原因・条件）理由付けはないか。 誤った（または悪用された）理由付けはないか。

事象の本質の解明に成功しているかを問う読みとして「評価読み」を提起している⁽⁹⁾。

また，森田（平成23年）は，「評価読み」について「読み取ったもの（ことがら・内容，表現方法，論理）をそれらの妥当性や問題の有無という観点から吟味・評価することであり，また，問題があるものについては，その問題を解決する方途を探り，実際に解決，改善してみるという行為を指している。」⁴⁾と定義している。

以上のことから，森田の「評価読み」を基に，筆者の書いた文章に対して，読者が「内容・ことがら」「表現」「論理」の「妥当性，真偽性，適切性」を評価していくという読みを本研究での「評価読み」とする。

阿部（2003），森田（2010），井上（2007）は，文章を吟味，評価する観点をまとめている⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾⁽¹²⁾。3氏が示した観点を「内容・ことがら」「表現」「論理」に分類して表3に示す。3氏の示す観点にはいくつかの共通点がある。「内容・ことがら」については3氏とも選ばれた事実の適切性，妥当性の評価を挙げている。このことから，本研究における「内容・ことがら」の「評価読み」の観点は「選ばれている内容・ことがらは，ふさわしいか。」「説明するための材料は十分足りているか。」とする。

また，「表現」については3氏とも用語，表現の適切性，妥当性を評価の観点に挙げている。

さらに，森田は，文体に工夫はあるか，とレトリックについても評価の観点に挙げている。これらを

まとめ，本研究における「表現」の「評価読み」の観点は「言葉の使い方は適切か。」「言葉の使い方を工夫しているか。」とする。

「論理」については，3氏とも結論そして結論に至った過程の妥当性，適切性の吟味と評価を挙げている。このことから，本研究における「論理」の「評価読み」の観点は「文章のつながりは筋が通っているか。」とする。

これらを基に，本研究で扱う「評価読み」の観点を五つに整理し，次頁表4に示す。なお，研究対象学年が第5学年であるという発達段階を考慮して，今回は「真偽性」についての評価は行わないものとする。また，観点を選んで読む際に用いるレーダーチャートを次頁図1に示す。レーダーチャートを用いることで，項目間のバランスが視覚的に分かり，それぞれの文章の特徴を捉えやすくなる。

(2) 目的に応じて「評価読み」の観点を選ぶとは

先述のとおり，現代社会では多種多様な情報を簡単に収集することが可能になってきた。得た情報を自分が活用するためには，多種多様な情報を評価することが必要であり，そのためには，それらの情報の種類等に応じて，評価の観点を変える必要がある。読み手が求めるもの，つまり読む目的が異なれば，当然，読む時の評価の観点も異なる。

このことから，「目的に応じて『評価読み』の観点を選ぶ」とは，テキストを読む際にテキストの何に注目して読むかという評価の観点を選ぶ行為とする。

表4 本研究における「評価読み」の観点

評価対象	評価の観点	
内容・ ことがら	①	選ばれている内容・ことがらはふさわしいか。 (妥当性・真偽性・適切性)
	②	説明するための材料は十分足りているか。 (妥当性・適切性)
表現	③	言葉の使い方は適切か。 (妥当性・適切性)
	④	言葉の使い方を工夫しているか。 (妥当性・適切性)
論理	⑤	文章のつながりは筋が通っているか。 (妥当性・適切性)

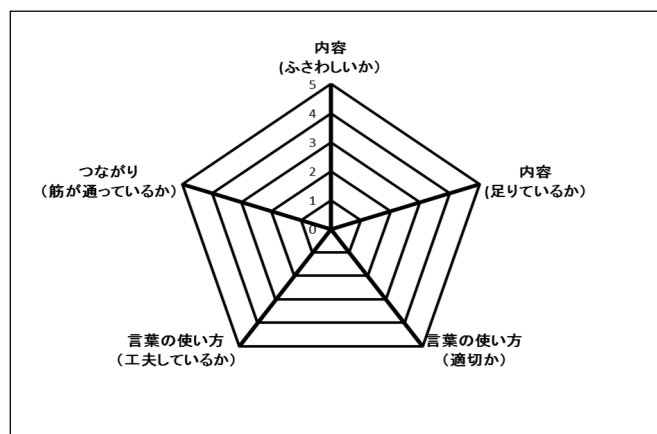


図1 評価読みレーダーチャート

(3) 目的に応じて「評価読み」の観点を選んで読む学習の展開

ア 単元の見通しをもつ段階

「筆者の考えの進め方をとらえ、自分の考えをまとめよう」という単元を設定し、教材文を読んで、意見文を書くという学習活動を行う。意見文を書くためにはどのような力が必要か、どのような学習をすればよいかを考えさせることで、付けるべき力を児童が自覚し、単元の見通しをもつことができるようにする。

イ 読みの観点が変わること気付く段階

本研究では、「説明型文章」から説明文を、「論説型文章」からは論説文を取り上げることとする。また、児童が教科書教材以外で日常ふれる文種として、ポスターを取り上げることとする。

それぞれの文種について良文、悪文の2種類の文章を提示し、目的と照らし合わせて「評価読み」の観点に沿って読んでいながら、レーダーチャートを作成していく。例えば、論説文の場合「どちらの文章が納得できるか選ぶ」という目的で、児童に良文、悪文それぞれの文章を評価させ、レーダーチャートにまとめさせる。まとめたレーダーチャートを比較させることで、納得できた方は「つながり」が優れていることに気付かせ、「納得できるか」とい

う目的で読む際には「つながり」を重視して評価していくことに気付かせる。稿者が考える説明文、論説文、ポスターの典型モデルレーダーチャートを図2に示す。

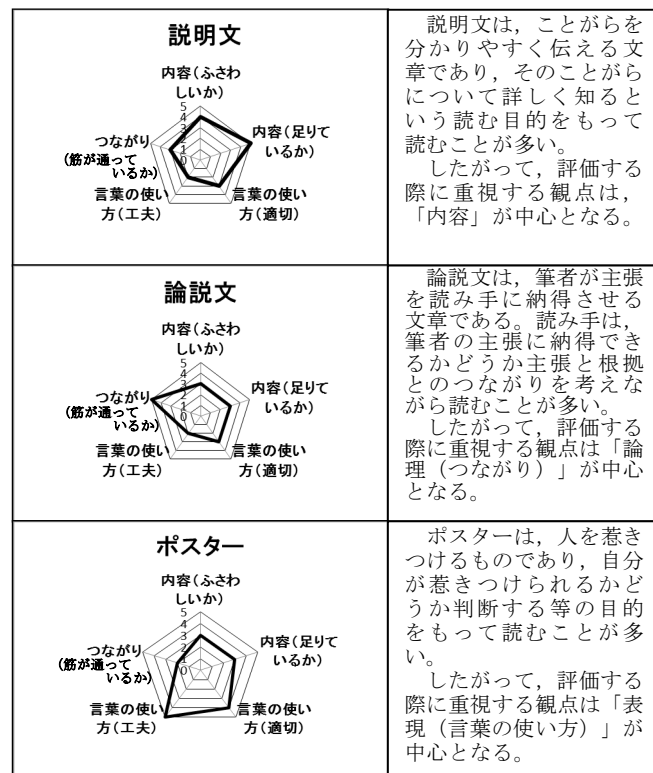


図2 典型モデルレーダーチャート

ウ 「評価読み」の観点に沿って評価する段階

教科書の教材文(論説文)を読んで、筆者の工夫を評価し、レーダーチャートにその結果をまとめていく。この際、論説文モデルレーダーチャートを参照し、重点を置いて評価する観点到「つながり」を選んで読むようにする。

児童に評価の結果を数値化させることについてはその数値は児童に決定させることとするが、その際、その数値とした根拠を、他の観点との比較や文章を手がかりにさせることなどに留意し、筆者の工夫について評価させていくようにする。

エ 「評価読み」の観点を選んで読む段階

教材文「見立てる」について、目的に照らし合わせて児童自ら重点を置いて「評価読み」する観点を選んで読み、その結果をレーダーチャートにまとめる。そして、レーダーチャートを基に、重点を置いて「評価読み」した観点を中心に、筆者の工夫に対する意見文を書く活動を設定する。以上、アからエまでの段階を組み合わせた単元構想図を図3に示す。

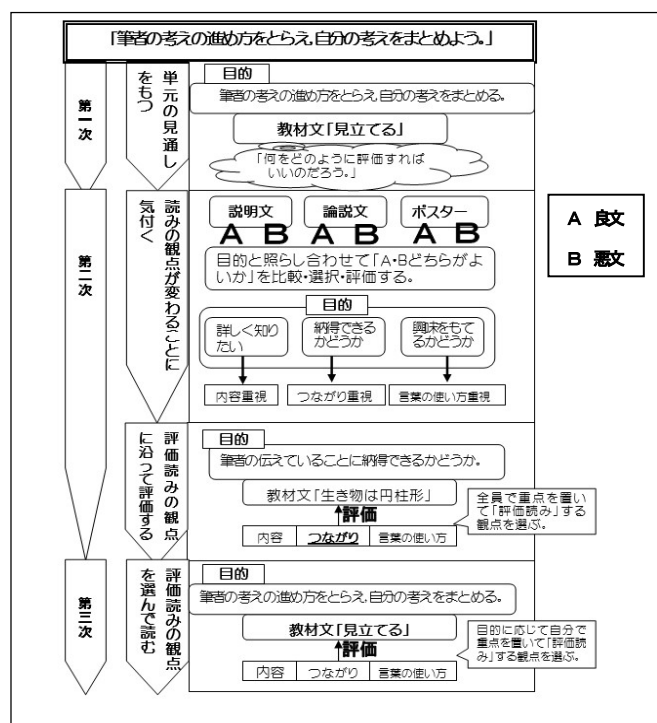


図3 単元構想図

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

目的に応じて「評価読み」の観点を選んで読む学習活動を行わせることで、筆者の工夫を評価する力を育てることができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法を表5に示す。

表5 検証の視点と方法

検証の視点	方法
筆者の工夫を評価する力と意識が高まったか。	・事前・事後テスト ・事前・事後アンケート
目的に応じて「評価読み」の観点を選んで読む学習活動は、筆者の工夫を評価する力を育てるのに有効であったか。	・意見文 ・ノート

Ⅳ 研究授業について

1 研究授業の概要

- 期 間 平成28年6月27日～平成28年7月8日
- 対 象 所属校第5学年（3学級75人）
- 単元名 筆者の考えの進め方をとらえ、自分の考えをまとめよう
- 教材文 「生き物は円柱形」本川達雄（国語五 銀河 光村図書 平成27年）

○ 目 標

目的に応じて重点を置く「評価読み」の観点を選んで読むことができる。

2 指導計画（全8時間）

次	時	主な学習活動
一	1	「筆者の考えの進め方をとらえ、自分の考えをまとめよう」という単元のゴールを知り、学習の見通しをもち、教材文を読む目的を設定する。
	2・3	説明文、論説文、ポスターを評価の観点に沿って読み、評価したことをレーダーチャートにまとめる。
二	4・5	教材文「生き物は円柱形」を読んで、筆者の工夫を見付ける。
	6	レーダーチャートにまとめたことを交流し、筆者の工夫を評価したことをまとめる。
三	7	自分で重点を置いて「評価読み」する観点を選んで教材文「見立てる」を読み、評価する。
	8	単元の学習で身に付けた力を振り返る。

V 研究授業の結果分析と考察

1 筆者の工夫を評価する力と意識が高まったか

(1) 事前テスト・事後テストの結果より

事前テスト・事後テストでは、筆者の工夫を見付ける力（問い1）、筆者の工夫を評価する力（問い2）を検証する問題を設定した。問い1は、文章に施された筆者の工夫を見付け、四つの選択肢の中から該当する工夫を選択する問題である。問い2は、「地域の方が行きたくなるようなチラシを選ぶ」という目的を設定し、2種類のチラシ（通知文・ポスター）から目的に応じて評価するものである。

ア 筆者の工夫を見付けることについて

問い1「筆者の工夫を見付ける力」の判断基準を表6、結果を図4に示す。

表6 筆者の工夫を見付ける力を検証する判断基準

段階	判断基準
A	筆者の工夫を正しく三つとも見付けている。
B	筆者の工夫を三つのうち、二つ見付けている。
C	筆者の工夫を一つだけ見付けている。
D	筆者の工夫を見付けることができていない。

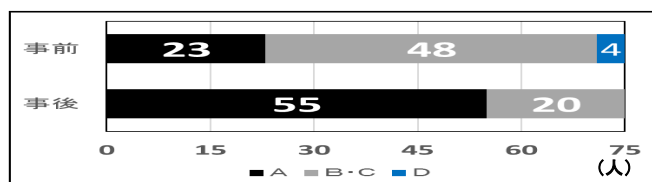


図4 筆者の工夫を見付ける問題の結果

事前テストではAは23人（30％）であったが、事

後テストではAは55人（73％）に増加した。また、Dは事前テストで4人であったが、事後テストでは0人となっている。筆者の工夫を見付けた児童aについて分析した結果を表7に示す。

表7 筆者の工夫を見付けることについての事前・事後テスト問い1の結果

事前	事後	A	B	C	D	計（人）
A		19	3	1	0	23
B		30	9	0	0	39
C		5（児童a）	4	0	0	9
D		1	3	0	0	4
計（人）		55	19	1	0	75

事前テストでCもしくはDであった13人のうち6人が事後テストにおいてはAとなった。また、残りの7人もBへと上がった。ほとんどの児童が筆者の工夫を正しく見付けることができるようになったといえる。事前テストでAだったが、事後テストでCとなった児童も1人いたが、この児童は授業に集中しにくい児童で、学習に集中して参加することができなかったことが原因と考えられる。

イ 筆者の工夫を評価することについて

問い2「筆者の工夫を評価する力」について児童の記述を①目的に応じて「評価読み」の観点を選んでいるか、②選択したものとその理由が整合しているかという観点で分析した。結果を図5に示す。

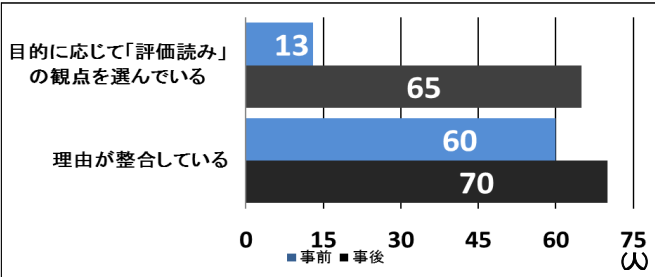


図5 事前・事後テスト問い2の結果

事前テストでは、目的に応じて「評価読み」の観点を選ぶことができていた児童は13人（17％）であった。記述を分析すると、自分が評価しやすい観点で評価しており、目的に即したのものにはなっていない児童が多く、目的に応じて「評価読み」の観点を選んで評価することができないことが明らかとなった。一方、事後テストでは、65人（87％）の児童が目的に応じて「評価読み」の観点を選んで評価することができていた。次の表8は、問い1においてC

段階からA段階へととなった児童aの問い2の記述の変容である。

表8 事前・事後テストの児童aの変容

事前	（選んだチラシ）A （選んだ理由） Aにはプログラムがあって、やる順番が書いてあって、学年も書いてあるのでAのチラシを選びました。
事後	（選んだチラシ）A （選んだ理由） ぼくはAのチラシを選びました。理由は二つあります。一つ目はプログラムがあることです。プログラムがあると、地域の人がいつどの学年が発表するかが分かるからです。二つ目はみどころが書いてあるところです。みどころが書いてあると地域の人より楽しみになるからです。この二つの理由からAはぼくにとって納得できるチラシだったので、Aを選びました。

※表中の下線は稿者による。（以下の表も同じ。）

事前テストでは、工夫とその効果まで捉えきれていない。また、目的に即した記述も見られなかった。しかし、事後テストでは「地域の人たちが」という目的を意識した言葉も見られ、「プログラムがある」といつ、どの学年が発表するかが分かる。」と工夫の効果を表す記述も見られようになった。この児童aの事後テストの記述は、事後テストでA評価だった児童群の記述の典型である。

以上ア、イの結果から、児童は筆者の工夫を見付けた上で、目的に応じて「評価読み」する観点を選び、その筆者の工夫を評価する力が育ったといえる。

(2) 事前・事後アンケート結果より

図6は「筆者の工夫を評価する説明文の学習は役に立つか」という質問項目についての回答状況を示している。

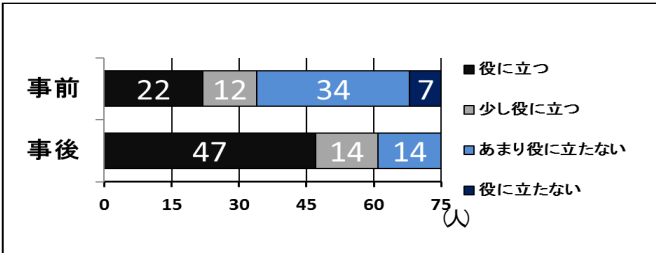


図6 筆者の工夫を評価する学習の有用性に関する児童の意識の変容

筆者の工夫を評価する学習の有用性についての肯定的回答が増加している。さらに、肯定的な回答をした児童の「これから文章を読むときにどんなことに気を付けながら読むか。」「どんなときに役に立つか。」という質問項目に対しての記述の分析結果を次頁表9及び次頁表10に示す。

表9 文章を読む際の留意点に関する回答例

	回答例
筆者の工夫に着目したもの	・読む人を納得させるために筆者がどんな工夫をして書いているか見付けながら読む。
評価に関するもの	・どこがよくてどこが分からないか評価しながら読む。 ・必要なことが書いてあるか、つながっているかに気を付けて読む。 ・だまされないように読む。 ・題名と本文がつながっているか確かめながら読む。

表10 「評価して読むこと」の活用場面に関する回答例

活用場面	回答例
評価する場面	・インターネットやチラシなどで本当にそれが正しいのかを見極めるとき ・友だちが書いた作文を読んで「こうやったらもっとよくなるよ。」とアドバイスするとき
読む場面	・次の説明文を読むとき

分析結果から、児童は筆者の工夫を見付ける読み方や工夫を評価しながら読む読み方を身に付けたと実感していることが分かる。また、実生活や他の授業において生かそうとしていることも分かる。

これらのことから児童に「筆者の工夫を評価しながら読む」という読み方を実生活で使う意識が高まっているといえる。

以上(1)(2)の分析から、目的に応じて「評価読み」する観点を選び、筆者の工夫を評価する力と意識を高めることができたと考える。

2 目的に応じて「評価読み」の観点を選んで読む学習活動は有効であったか

ここでは、各学習活動において典型的な記述をしていた児童aを取り上げる。児童aは先述したように、問い1においてC段階からA段階へと上がった児童である。

(1) 「評価読み」の観点を選ぶ活動における記述の分析

説明文、論説文、ポスターをそれぞれ2種類ずつ提示し、「目的と照らして、A・Bどちらがよいか」を選択させ、p.52図2のレーダーチャートを用いて評価する活動を行った。

表11は第2時での論説文「早起きは頭と体をきたえるA・B」を読んで「実際に早起きしてみたくなるような文章を選ぶ」という目的と照らして評価する活動で「AとBの文章を評価する場面」の授業前半と授業後半の児童aの記述の変容を示したものである。

表11 児童aの評価に関する記述の変容

前半	Bの方がいいと思います。理由は、Aは理由なしに「でも本当なのです。」と言われても、説明もせずに本当なのだろうかと信用できないからです。
----	---

後半	Bの方がいいと思います。Aは「早起きしたらおうちの人にはめられる」ということと「頭や体にいい」ということはつながらないからおかしいです。Bは「早起きする→朝食をゆっくりとれる→よくかむ→脳のはたらきが活発になるとつながっているからです。
----	--

前半では、Bを選んだ理由についての記述はなく、「AがおかしいからBの方がよい」という評価の仕方となっているが、よいと評価するならどんなところがよいかを書かないと理由にはならないことを確認した結果、後半のような記述に変容した。

児童全員のレーダーチャートを分析すると、目的に合った説明文は「内容」、論説文は「つながり」、ポスターは「言葉の使い方」の数値が高いものとなり、それぞれの文種のモデルレーダーチャートを作成し、「詳しく知りたいときは内容を重視する」など、目的に応じて重点を置く「評価読み」の観点をつかんでいた。表12は児童aの授業の振り返りの記述である。

表12 児童aの授業の振り返り

第3時	説明文は相手に正しく分かりやすく伝えることが大切で、論説文は相手を納得させることが目的だと知りました。
第4時	次は「つながり」に気を付けて読む。それは、題名が「○○は○○」の形で、筆者の考えを書いている文章だと思ったから。

第3時の振り返りから、文種の特徴をとらえていることが分かる。また、モデルレーダーチャートの結果から、その目的に応じて重点を置いて読む観点を変えなければならないと考えることもできた。また、第4時の振り返りから、題名から文章の内容について予想し、自分で重点を置いて読む観点を決めていることが分かる。

このようにレーダーチャートを用いて評価する活動を行った結果、事後アンケート「レーダーチャートを使って『評価読み』の観点を選んで読む活動は役に立つか」では73人(97%)の児童が肯定的に回答した。(図7参照)

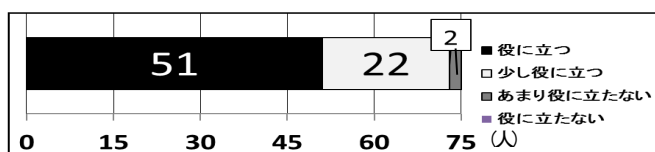


図7 レーダーチャートの使用に関するアンケート結果

(2) 目的に応じて自分で「評価読み」の観点を選んで評価する活動における記述の分析

ア 「評価読み」の観点を焦点化する

「国語五銀河」(光村図書)の教材文「生き物は

円柱形」を用いて、文章を評価し、レーダーチャートにまとめる活動を行ったところ、児童全員が自分なりにレーダーチャートにまとめることができた。まとめたものを交流すると、多くの児童が「つながり」を重視して評価していることがわかった。そこで、文章の「つながり」に重点を置いて全体で評価していく活動を行った。

このように、レーダーチャートを用いることで、重点を置いて評価していく観点を焦点化できた。

イ 「評価読み」の観点に沿って評価する

「つながり」に重点を置いて、「筆者は読者を納得させるためにどんな工夫をして書いているか」という視点で読み進めた。工夫を記述させる際は、工夫とその効果も書くように指導した。その結果、全員が筆者の工夫について記述していた。効果を書かせることで工夫の意味を捉えさせることができた。

ウ 目的に応じて自分で「評価読み」の観点を選んで評価する

「国語五銀河」（光村図書）の教材文「見立てる」を提示して、「筆者の伝えたいことに納得できるか評価する」という目的を設定し、児童に自分で重点を置く「評価読み」の観点を選択させ、評価させた。次の表13は児童aの記述である。

表13 児童aの教材文「見立てる」に対する評価の記述

重点を置いた観点	記述
<div>内容</div> <ul style="list-style-type: none"> ・ふさわしいか <div>つながり</div> <ul style="list-style-type: none"> ・筋が通っているか 	<p>（主張）見立てることは、想像力によって支えられている。</p> <p>（評価）ぼくは、この「見立てる」という文章に納得できます。理由は、「見立てる」と書いてただけでは、どういう意味か分からないけど、筆者はあやとりを例にして説明していました。みんながよく知っているものを例にすることで、読者はイメージしやすいので、この工夫は分かりやすくして納得できました。</p>

児童aは、自分で重点を置く「評価読み」の観点として、主張と事例の「つながり」を選び、つながりがあると評価した。その上で、記述にあるように、主張を読み手に納得させるのに、よりふさわしい事例として、読み手に身近な「あやとり」を取り上げていると「内容」の観点で、筆者の工夫を評価している。さらに、筆者の工夫を見付けるだけでなく、その効果についても理解している。これらのことから、児童aは、目的に応じて自分で「評価読み」の観点を選んで読むことができたといえる。他の児童の記述を分析してみると、「もう一つ例を書いた方がもっと分かりやすくなる。」「生活とどんなふうにつながっているかを書いた方がいい。」など改善

案を書いているものが多くみられた。

教材文「見立てる」において、自分で重点を置く「評価読み」の観点を選んで読むことができていた児童は73人（97%）おり、そのうち36人は「筆者の工夫を評価する」事後テストでB・C・DからAに上がっており、7人はC・DからBに上がっていた。

以上（1）（2）より、目的に応じて「評価読み」の観点を選んで読む活動は、筆者の工夫を評価する力を育てるのに有効であったといえる。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

目的に応じて「評価読み」の観点を選んで読む学習活動は、筆者の工夫を評価する力を育てることに有効であることが分かった。

2 今後の課題

- 目的に応じて「評価読み」の観点を選んで読んだことをまとめる指導について工夫が必要である。
- レーダーチャートを用いて読む活動は評価項目を改善して、物語文の読みなどへも活用させる。

【注】

- (1) 西郷竹彦(1985)：『説明文の授業 理論と方法』明治図書pp. 67-68に詳しい。
- (2) 森田信義(1984)：『認識主体を育てる 説明的文章の指導』溪水社p. 2及びpp. 87-88に詳しい。
- (3) 植山俊宏(2009)：『小学校 国語科授業研究 第四版 田近洵一 大熊徹 塚田泰彦編 第3章 実践の研究 2説明的文章の指導』教育出版p. 76に詳しい。
- (4) 長崎伸仁 編著(2008)：『表現力を鍛える説明文の授業』明治図書p. 17に詳しい。
- (5) 植山俊宏(2009)：前経書p. 72に詳しい。
- (6) 森田信義(1984)：前掲書p. 88に詳しい。
- (7) 井上尚美(1989)：『言語論理教育入門』明治図書p. 196に詳しい。
- (8) 奥水実(昭和40年)：「読解指導の近代化」『教育科学国語教育』第七十九号 明治図書p. 128に詳しい。
- (9) 森田信義(1989)：『筆者の工夫を評価する説明的文章の指導』明治図書p. 41に詳しい。
- (10) 阿部昇(2003)：『文章吟味力を鍛える－教科書・メディア・総合の吟味』明治図書pp. 178-180を参照されたい。
- (11) 森田信義(2010)：『新訂 国語科教育学の基礎』溪水社pp. 152-154を参照されたい。
- (12) 井上尚美(2007)：『思考力育成への方略－メタ認知・自己学習・言語論理－』明治図書pp. 93-94を参照されたい。

【引用文献】

- 1) 森田信義(2007)：『「評価読み」の理論と方法 一おもしろくて、役に立つ説明的文章の指導－改訂版』p. 6
- 2) 井上尚美(1989)：『言語論理教育入門』明治図書p. 200
- 3) 阿部昇(2009)：『国語教育指導用語辞典 第四版』教育出版p. 107
- 4) 森田信義(平成23年)：『「評価読み」による説明的文章の指導』溪水社p. 23